

令和 2 年 9 月 17 日現在

機関番号：42671

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2019

課題番号：16K13533

研究課題名（和文）「戦争の記憶」継承における教育実践理論研究

研究課題名（英文）A Study of Educational Practice Theory in Inheritance of "Memory of War"

研究代表者

高橋 舞 (Takahashi, Mai)

立教女学院短期大学・幼児教育科・専任講師（任期制）

研究者番号：50735719

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、戦争記憶が<共生知>として継承される技法に焦点をあて、A.戦争記憶が人間の生き方を規定する<生の実践知>と結びつく場合、B.戦争記憶が<共生知>として体得される場合、C.戦争記憶が多くの人に忘れられない仕組みという3つの課題を解明することを試みた。その結果、A.「受苦的経験」、B.「加害意識」、C.「民衆思想化」を有するといった、3つの必要条件があることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本では、平和な社会を維持する上で戦争記憶を継承することが欠かせないと考えられ、教育実践されてきた。しかし終戦から75年が経過した今日では、戦争記憶の教育メディアとしての効果が風化・後退することで戦争記憶の変質・矮小化が起き、戦争記憶が逆に、「戦争」を可能にしかねない、「敵」を創出させ国家主義的団結をさせる教育メディアとしての効果を発揮する傾向性が増しつつある。これに対し本研究は、戦争記憶継承という営為を原理的・哲学的に問い直し、「共生知」として継承されるための実践知を抽出しようという試みであり、戦争体験者不在時代到来後にも有効な戦争に抵抗しうる教育思想を立ち上げるものである。

研究成果の概要（英文）：In this study, we focused on the strategies of how war memories are inherited as "the Wisdom Co-existence", and tried to clarify three issues: A.in what cases war memory unites with the "practical wisdom of life" that defines the way humans live, B.in what cases is war memory acquired as "the Wisdom Co-existence", C.how war memory can be remembered by many people,.As the result of this study,we were able to identify three requirements: A. "passionate experience", B. "consciousness of harm", C. "to be widely thought by the people".

研究分野：教育学

キーワード：戦争記憶 継承 生の実践知 共生知 加害性 受苦的経験 原郷 民衆思想

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本では戦前教育、戦後教育の用語が流通されてきた点に顕著なように、国内教育の系譜を戦前と戦後で区別し、前者を反省する形で現在の教育が形作られてきた経緯がある。ここには、二度と戦争を起こさない平和な社会を築くという、憲法上のポリシーに基づいた教育界の姿勢が存在し、「一つの花」「ちいちゃんのかげおくり」「おかあさんの木」「川とノリオ」など戦争を題材とした国語教材や、社会科、地理歴史、現代社会、道徳、総合の時間、修学旅行行事(特別活動)など、学校教育全体を通じた平和教育が展開されてきた。しかし、長崎への修学旅行で戦争体験者による講話を妨害する行為が起きたり、ネット上で戦争によって日本が被害を与えた国である中国(人)や韓国(人)に対するヘイトといえるあからさまな誹謗中傷を書き込む「ネトウオ(ネット右翼)」と呼ばれる若者が続出したりするなど、戦争記憶を通して平和を教える困難さに直面する状況をむかえている。この困難さは戦争記憶を継承するにあたって、

(1)終戦から75年という時間が経過し、戦争記憶の継承教育メディアとしての効果が風化・後退している

またそのことで、記憶されるべき「戦争の全体像」が事実から大きく変質・矮小化・局所的に象徴されるようになり、

(2)戦争記憶が平和とは反対に、「敵」を創出させ国家主義的な団結をさせる教育メディアとしての効果を発揮させやすくなりつつある

問題として捉えられる。このように戦争の悲惨さが忘れ去られる一方で排除すべき「敵」が象徴化・造形化される傾向性の先に、再び「戦争」の可能性が生起していると言える。戦争体験者不在時代到来を目前にし、このような事態に対抗するには、戦争記憶継承という営為を原理的・哲学的に問い直し、共生知として継承されるための実践知を提供できる教育思想が立ち上げられる必要に迫られている。

2. 研究の目的

上述の戦争記憶継承に関わる問題傾向が打開され、戦争記憶が共生知として継承される教育実践を可能にするため、次の3つの課題を設定し、それぞれの解明を試みる。

A.「継承」は、単なる知識習得とは異なる。継承内容が心に深く根付き、人間の生き方そのものに変容を与え行動実践を規定する「身体化」されることを意味する。現在の戦争記憶の風化や、継承教育メディアの後退の問題とは、戦争記憶に関する教育実践が知識習得にとどまり「身体化」されないという問題とも言い換えられる。したがって、戦争記憶が知識習得にとどまらず、人間の生き方を規定する「継承」という生の実践知に結びつく場合の条件が解明される必要がある。この点を、戦争記憶の継承に実際に携わっている人物(=身体化されたことによって戦争記憶の継承者になった人物)に対する史資料研究および聞き取り調査によって明らかにする。

B.戦争の記憶継承は、「敵」を創出させ戦争を可能にする実践知として獲得される場合もあり、共生知として生の実践知が体得される場合とのちがいを原理的に解明し分岐点を厳密化しておく必要がある。この点に関しては高橋の既存研究(研究活動スタート支援26885077)より、戦争記憶継承の教育実践は年々、「われわれ=日本人」の戦争記憶に限定されてきている傾向性が抽出されている。広範な占領記憶を有する日本の戦争記憶空間における継承教育メディア研究には、「かれら」に及ぼした戦争記憶が含み込まれ、とりわけ日本が大きな被害を与えた東アジア全体で共生知として共有できる記憶継承の実践が求められる。このため本研究では、今日、最も関係改善が求められる国の一つである「韓国」を研究対象地を含め、遺跡・慰霊碑・戦争歴史博物館などの戦争記憶空間における教育メディア分析や、戦争体験者、戦争記憶継承に携わっている人物への聞き取り調査を通し、「敵」を創出しやすい戦争記憶においてもなお、共生知として戦争記憶が体得される場合の条件がなのであるのかについて、解明を試みる。

C.A.B.に関しては、個人の「身体化」の際に必要な条件になるが、戦争記憶継承が平和な共生社会の形成に貢献するには、人々に広く継承される仕組みが明らかにされなければならない。

戦争記憶空間は、その場に起きた凄惨な「戦争の記憶」を遺すために、跡地に歴史館やモニュメントを設置し戦争記憶空間化されるが、そのように空間が整地・変質されるため、一般的には、本来存在していたはずのある部分が見えなくなり戦争記憶を実際の形から後退させてしまう問題が指摘されている。このように実際に起こったことのリアルさが後退するために戦争記憶や戦争記憶空間が、継承という「身体化」ではなく知識習得や知識習得の場に留まるものになり得てしまう場合が多いと考えられる。そこで、全体的には風化されつつある戦争記憶空間の中でも、継承の強度を保っている記憶空間の調査および、その場の戦争記憶空間化に携わった人物への聞き取り調査を実施し、記憶空間が変質しても継承能力を保つ際の条件を明らかにする。

以上の3つの課題を設定し、それぞれ個別に追究していく。その上で明らかになった成果を統合し、戦争記憶を「共生知」として継承する教育実践に必要な教育思想の方向性を示したい。

3. 研究の方法

本研究は、沖縄と韓国を主要フィールドにし、(1)遺跡・慰霊碑・戦争歴史博物館の戦争記憶空間における教育メディア効果分析、(2)戦争・厄災などの記憶継承に携わっている人物への史資料・聞き取り調査研究によって、上述のA.B.C.を明らかにする。

4. 研究成果

研究初年度にあたる2016年度は、国内の主要フィールド地としては6月、11月の2回の沖縄へのフィールド調査を実施した。研究調査協力を得ている沖縄県立平和祈念資料館の非参与観察および、館運営に関する近況情報や資料提供を得た他、沖縄に強制的に連れてこられ虐殺された軍夫たちの慰霊碑「恨之碑」の非参与観察(沖縄読谷村)および、その慰霊式の参与観察などを実施した。この「恨之碑」は、加害者側と被害者側それぞれの異なる立場から、共に記憶を共有しようとする韓日による協働の取り組みとして、韓国慶尚北道英陽郡と沖縄読谷村にそれぞれ建てられており、戦争記憶継承を通じた韓日による共生の取り組みが継続的に行われていることがわかった。そこで、沖縄側の取り組み母体である「恨(ハン)之碑の会」に依頼し代表・安里英子氏をはじめ、碑を作成した反戦彫刻家・金城実氏、反戦地主やチビチリガマの発掘調査を行った人物として知られる僧侶・知花昌一氏など、会員への聞き取り調査も開始した。また、6月の沖縄フィールド調査の際は、アイヌやハンセン病、水俣病反差別運動に実践的に関わりながら「共生の哲学」を深めた民衆思想家・花崎皋平氏にも同行(途中参加)いただき、ハンセン病隔離施設であった名護市にある愛楽園の非参与観察や、花崎氏の親交のある沖縄の民衆思想家の人々との交流実践の参与観察、花崎氏への聞き取り調査を実施することもできた。

韓国のフィールド研究は12月、2017年3月と2回実施し、「4.19民主墓地」、「国立ソウル顕忠院(国立戦没者墓地)」、「ソデムン刑務所」などの非参与観察、韓国における主要研究フィールド先としているナムムの家の「日本軍「慰安婦」歴史博物館」非参与観察および「ナムムの家」に居住する元「従軍慰安婦」とされたハルモニ(韓国語でおばあさんの意味)、館員の方への聞き取り調査・資料収集などを実施した他に、沖縄フィールド調査で新たに関係性をつくることができた「恨(ハン)乃碑」の韓国側の窓口になっている「民族問題研究所」所長・イ・ヒジャ氏への聞き取りや、民族問題研究所が計画していた「植民地歴史博物館(2018年開館)」の資料が仮展示されていた資料室の非参与観察・資料収集も実施できた。

「みんながきらいなフェミニズムの可能性」(雑誌論文)や『教育思想事典 増補改訂版』(図書)などに、これらの史資料・調査研究を通して得られた成果の一部を活かすことができた。

2017年度は、韓国フィールド調査を実施せず、2016年度実施の調査内容の分析と整理を行った。フィールド調査としては沖縄へのフィールド調査を集中的に実施(4月、6月、2018年3月)した。具体的には、研究調査協力館・沖縄県立平和祈念資料館で開催された沖縄県内の博物館・美術館大会や、強制連行究明ネット主催の第11回強制動員真相究明全国集会・沖縄大会に参加し参与観察すると共に、後者では同集会が主催した南部戦跡および、読谷の戦争記憶空間へのフィールドツアーにも同行し参与観察を行った。また「残波の大獅子」・「チビチリガマ慰霊モニュメント」・「恨ノ碑」など、反戦彫刻家・金城実氏が制作した作品が設置、展示されている空間の非参与観察を行うと共に、金城氏と、金城氏と関わりの深い知花昌一氏の2人物を中心とした聞き取り調査、および2人の「戦争の記憶」継承活動における人々との交流の様子について継続的に同行取材・参与観察を実施した。

この他、「戦争の記憶」と深く関わるハンセン病差別継承のための活動を行ってきた金正美氏への聞き取り調査も開始した。

これらの研究を通して、戦争モニュメントや戦争アート作品など、戦争記憶が戦争記憶装置化される際の意義や課題、およびそれらが「共生知」となる存立条件に関する深い示唆が得られ、教育実践理論の創生に必要な諸概念を整理することができた。またこの成果の一部を「戦争の記憶」継承の原理的考察」(雑誌論文)に活かすことができた。

2018年度は本来最終年度であるが、子が介護を要する病気を発症したため年度途中から研究中断せざるを得ず、一年間の研究延長申請を行い、承認を得た。このため、研究期間が4年にまたがることになった。

上述の理由で2017年度に引き続き2018年度も韓国フィールド調査の実施が叶わなかったが、「戦争の記憶」を通じた韓日交流の要となっている「恨の碑」慰霊式(6月16日・3年連続参加) 沖縄慰霊の日(6月23日) 沖縄の盆(8月25日)と、いずれも沖縄の「戦争の記憶」として重要な日を中心に3回の沖縄フィールド調査を実施し、人物研究の中心となる金城実氏、知花昌一両氏の上記の関わり方について、きめ細やかな非参与・参与観察を行うことができた。

またこれらの研究成果として、2018年9月に行われた教育思想史学会大会にて両氏に登壇いただき、沖縄の戦争記憶継承において重要視され、両氏を繋いだ起点となった強制集団死の記憶を遺す「チビチリガマ」(読谷村)に焦点化したテーマで成果報告を行った。研究目的に記載した課題のうちここでは特にC.の成果として、地域全体で丁寧な議論がなされ協働により手作りで空間化されていくこと、およびその営為の過程で人々の間で広く起こった「民衆思想化」の現象こそが戦争記憶空間の変質による「後退」という効果以上に、継承能力を増大させる可能性を持つ点が明らかにされた(学会発表)。

さらに10月に開かれた教育哲学会大会では、交流を継続してきた花崎皋平氏、金正美氏に登壇いただき、継承の研究を行っている岡部美香氏(大阪大学)との4名の共同発表で、共生知得を基軸とする教育実践理論の創生に必要な諸概念を整理・提示し(学会発表)かつ大阪大学教育学年報(雑誌論文)教育哲学会学会誌(雑誌論文)に成果報告を行うことができた。ここでは、それぞれの体験から、共生知継承の実践者に至る「身体化」が起こる共通項とし、1.継承する対象に出会った際に「受苦的経験」がもたらされる(研究課題A)、2.自らの加害性が省みられ、人間が本来生きる生命的世界・原郷に思いを馳せられるようになる(研究課題B)、3.さらに1・2が起こる「身体化」は、「受苦的経験」と「加害性を顧みる」ことが実践された「媒介者(戦争・厄災の直接体験者も含まれる)」を要すること(研究課題C)が明らかになった。

最終年度となった2019年度は、2018年に思想史学会にて研究成果の一部として公表した、強制集団死の記憶を遺す「チビチリガマ」戦争記憶空間の継承に関する金城実氏、知花昌一氏との共同発表を、両者の発言を中心に文字化し教育思想史学会学会誌に掲載した(雑誌論文)。被害・加害の立場を有する継承者たちが「協働=共生」し民衆思想化されることが、共生知として人々に広く継承される存立条件となる点を、「チビチリガマの記憶継承に決定的に関わった両者による証言」という貴重な記録の形で公表することができた。

また10月、2020年3月の2回に渡り北海道に住む花崎皋平氏を訪ね、民衆思想運動実践者である歌手・李政美氏のコンサートに同行し参与観察を行ったり、花崎氏自宅で思想実践経緯が描かれている日記などの資料収集・聞き取り調査を行ったりすることができた。この他にも、11月には金城実氏・知花昌一氏と共に、両者の思想の多くの部分を継承していると自ら語るドキュメンタリー監督・三上智恵氏への聞き取り調査を行うこともでき、映画や歌、芸術作品、祭りなど多様な教育メディアを通じた民衆思想に共生知継承の豊かな教育可能性が秘められているという、研究をさらに進めていくための視座が与えられた。

さらに、12月には渡韓し、2018年に完成した「植民地歴史博物館」や「安重根烈士記念館」の非参与観察、継続的調査を行ってきた「ナムムの家」の聞き取り調査等のフィールド調査を実施することができた。特に「ナムムの家」は2015年より大規模リノベーションを行っており、研究者のスタート支援(26885077)挑戦的萌芽研究(16K13533)により、リノベーション開始前からの経過状況を直接継続的に観察して行くことができた。今回のフィールド調査時には8~9割方完成した時点までを考察できたため、今後は戦争記憶継承の空間が当事者不在となっていく過程と共生知継承における空間化の意義や課題点の公表に向け、さらに研究を進めていきたい。

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 金城実、知花昌一、高橋舞	4. 巻 第28号
2. 論文標題 「継承」の場が、より以上の記憶空間になる可能性 「集団自決」の記憶を遺すチビチリガマの継承実践から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 近代教育フォーラム	6. 最初と最後の頁 127-135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 岡部美香、金正美、花崎皋平、高橋舞	4. 巻 第24号
2. 論文標題 共生知 としての他者の記憶の継承	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大阪大学教育学年報	6. 最初と最後の頁 3-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.18910/71371	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 金正美、花崎皋平、岡部美香、高橋舞	4. 巻 第119号
2. 論文標題 「共生」と「継承」の間、あるいは「継承」と「共生」の間	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育哲学研究	6. 最初と最後の頁 127-133
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 高橋舞	4. 巻 第61号
2. 論文標題 「戦争の記憶」継承の原理的考察 - 教育課程に位置づく、新しい「戦争の記憶」継承の実践理論構築を目指して -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 立教大学教育学科研究年報	6. 最初と最後の頁 65 - 77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） http://doi.org/10.14992/00015735	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高橋 舞	4. 巻 25
2. 論文標題 みんながきらいなフェミニズムの可能性(コメント論文, シンポジウム2 フェミニズムとジェンダー論は教育学に何をもちたか? 思想史の中間総括)	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 近代教育フォーラム	6. 最初と最後の頁 152 ~ 158
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.20552/hets.25.0_152	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計3件(うち招待講演 1件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 金城実、知花昌一、高橋舞、岡部美香(司会者)
2. 発表標題 「継承」の場が、より以上の記憶空間になる可能性 ~ 「集団自決」の記憶を遺すチビチリガマの継承実践から ~
3. 学会等名 教育思想史学会第28回大会コロキウム1
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 金正美、花崎皋平、高橋舞、岡部美香(指定討論者)
2. 発表標題 「共生」と「継承」の間、あるいは「継承」と「共生」の間
3. 学会等名 教育哲学会第61回大会ラウンドテーブル3
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高橋 舞
2. 発表標題 共生教育の理論研究 「被害者教育」の観点から「加害者教育」の観点へ
3. 学会等名 神戸大学2017年度学術WEEKS(招待講演)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 教育思想史学会 編	4. 発行年 2017年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 888
3. 書名 教育思想事典 増補改訂版	

〔産業財産権〕

〔その他〕

高橋 舞 他、「どうして「ひとに会う」を通して学ぶのか？ 3年「総合的な学習の時間」を通じた取り組みから新学習指導要領の課題に迫る 子どもたちは何を問い 考え 語り 世界と関わろうとしたのか？」、奈良教育大学附属中学校2018年度教育研究会パネルディスカッションに総評者として参加・発表、2018年9月28日
高橋 舞、書評、斎藤直子/ポール・スタンディッシュ/今井康雄編『<翻訳>のさなかにある社会正義』、『近代教育フォーラム』第28号、pp. 163-166、2019年

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----